なぜなら、主人公や登場人物の感情を想像することができるからだ。この読み方は、実は小学二年生ぐらいからやっている。感情を想像しながら読むと、頭を使いながら本を読めるので、ふつうに読むよりも、何倍も楽しい。ねむいときに本を読んでも頭を使っているので、目覚ましになる。この読み方を学校の読書の時間にすると、とても効果的だ。なぜなら、昼寝のしたくなる時間だからだ。だから、この変な読み方は変えられない。

次の読み方は、朝早くに起きて本を読むこと。私は、朝と昼には強いが、夜になるとすぐに眠たくなってしまう。そのため、休日の朝は四時半から五時には、自動的に起きてしまう。一階におりていき、ずっと一人で本を読む。たまに、自分の部屋で読む。だれも起きていないところで、静かに本を読むのがとても好き。人の気配を感じずに、本を読めるので熱中できる。朝だと、自分の世界にすんなり入ることができる。だから、朝早くに起きて本を読むことがとても好きなのだ。

最初に紹介した読み方をしたことで、身につけたことがある。それは、感情の出し方。私はそれまで、いつ笑っていいのか、おこっていいのかよくわからなかった。しかし、本をたくさん読んでいるうちに、主人公はこういうときに感情を出すのだと思ったりもした。自分で登場人物の感情を想像することで、その感情を身につけられると思う。この読み方で感情の出し方がわかった。たんに、変な読み方をする変人ではなく、自分のために始めたことなので、今ではとてもよかったなあと思っている。

私は、これからもこの独とくな読み方を継続していきたいと思う。そして、興味を持った本はとことん読むことにする。本屋さんや図書館に行き、いろいろなジャンルの本にふれ、知識を増やしていきたい。まだまだ、人生長いので、たくさんの本が読めると思う。本を読むことで、学校の勉強にも役に立つし、人生のいろいろな場面にも役立ちそうだ。これからも読むことを、わすれないでおこうと思う。

《中学生の部》最優秀賞

私の開拓本

中部中学校　三年
寺西乃絵

私は「魔術はささやく」を読み、今までに感じたことのない、奇妙で不思議な感覚に襲われました。

私はこの本に出会うまでは、ミステリー小説からなんとなく、距離を置いていたところがありました。私の中で、ミステリー小説は「怖い」「恐ろしい」というイメージがあり、ハッピーエンドな物語が好きな私には合わない、と勝手に思い込んでいました。

そんな中、ふとこの本を手に取り、読んでいくうちに、何とも言い表せられない、渦のようにぐるぐる回る物語の世界に私は引き込まれていくのでした。

この物語は、主人公「日下守」という一本の軸を中心に物語が展開されていきます。そして、この軸上では数々の小さなドラマが繰り広げられています。そのドラマの内容は様々ですが「愛情」を感じるものもあれば「友情」そして「葛藤」などを感じるものもありました。物語の中盤に差し掛かるまでは、これらの幾つかのドラマが散らばっている、という感じで、この物語自体の全貌は、はっきりとつかめないという状態でした。しかし、後半にいくにつれ、一本の軸「日下守」についての様々なエピソードが加わっていき、どんどんと渦が深くなっていきました。

このように、この物語は、色々な要素が交錯しているため、一概に「こういう話でした」と片付けるのは困難ですが、そんな中でも、私が感じたことは「一人じゃない」と思えることの重要性、そして、あたたかさです。

私は「日下守」が好きになり、尊敬もします。もちろん、彼の行動力は「すごいな。」と思いますが「自分」というものをぶれずに持っているということに一番の素晴らしさを感じます。それは幼い頃から受けた「あの子は泥棒の子だから」という痛い視線や態度の影響だと思います。そして、彼は最後まで、気を緩めることなく、強くて、たくましかったと思います。

この物語は、残酷で、少しファンタジー要素もあり、そして、誰かから受け取る愛があるという、非常に複雑なストーリーでした。そんな中、多くのことを吸収した気がします。大切なことを教えてくれ、今までに感じたことのない感覚を味わわせてくれました。

自分自身の脈を打つテンポさえも変わりそうな勢いで読み、全て読み終わったとき、私はとても疲れ果てていました。それは、随分と私が、物語に引き込まれ、もがいていたからだと思います。

本当にこの本には感謝しています。もっと色んなミステリーも読んでみたい、という気持ちが込み上げてきます。本の世界の中で、私に新たな「ミステリー」という土地を開拓してくれたこの本「魔術はささやく」は私にとって、開拓使ならぬ「開拓本」です。これからもどんどん新しい本の土地を切り開いていきたいです。

《中学生の部》優秀賞

読む時間

桜中学校　一年
高橋朋子

「違う文字が違う言葉が違う
声が違う意味でさえ
私たちの魂で同じひとつの生き
る力になっていく
しばらく目を木々の緑に遊ばせ
て
あなたはふたたび次のページへ
と旅立ちます――」

この本は、アンドレ・ケルテスが一九一五年から一九七〇年までの「本や新聞を手にとってめくるという馴染みの行為によって、別世界へ引き込まれていく人々」を撮影した作品です。そして「この親しみやすい小さな本は彼自身のお気に入りの一冊」でもありました。

そんな写真たちの中でもとくに次の写真が心に残りました。

仕事の休けい中でしょうか。これは、一九六三年九月十日にヴェニスで撮影されたものです。水上都市ならではの、船での移動が印象的です。そして、運河の発達しているヴェニスらしく、本を読んでいる彼は、船で荷運びの仕事をしているようです。彼は、船をとめ、暑いのか日かげで読んでいますが、本に夢中になりすぎて仕事を忘れることのないよう時間には気をつけてほしいです。

モノクローム。アンドレ・ケルテスがこの本に残した数々の写真たちもまた、モノクロームです。カラーのように鮮やかな色を使っていないため、ひかえめな印象をあたえ、何より「ここはどんな色だろう」と人の想像力をかきたてます。自然を撮影するならカラーが良いが、人物などはモノクロームが良いと思いました。

アンドレ・ケルテスを魅了し続けた「読むことに心奪われる人々の姿」を街中で見かけることは、少なくなってきています。科学技術の発展により、世の中の多くの人は、本を読むことからスマートフォンなどの電子機器を使用することに熱中するようになりました。若い人は特に本を読むことが減ってきていると私は思います。私自身、小学校低学年や中学年のときは年に百冊以上読んでいたのに、今では年に二、三十冊ほどしか読まなくなりました。読まない理由なんてありませんが、読む理由もありません。しかし、この本はそんな私に「本が読みたい」と思わせてくれました。アンドレ・ケルテスが示す、「読む」という行為にぴったりの谷川俊太郎の「読むこと」という詩。この本に出てきた全ての人、そしてこの本を読む人の「魂で同じひとつの生きる力になっていく」と考えると、本というもののすごさ、すばらしさを感じ、心臓のあたりがぞわぞわしてきました。

また、この本の中でも何度か登場した、本の宝庫である図書館の環境が、より本を深く味わえる場となっているんだと思いました。

この本は私にとって、図書館という環境、そして本を、数十倍好きなものにさせてくれた、本に対する考え方を変えた、至宝の一冊となりました。

《中学生の部》優秀賞

私の本棚

港中学校　二年
木村好花

「トン、トン、トン」

本棚に、図書館で借りてきた本を置いていく。途中でふと手を止め、順番を少し入れ替える。はたから見たらちょっと変かもしれない。

私は小学生の頃から本棚に本を置く時にはあるこだわりを持っている。一番読みたい本を一番取り出しにくい場所に置く。ワクワクの度合いがあまり高くない本が一番取り出し易くなるように並べるのだ。理由は簡単。一番読みたい本を楽しみとして取っておくためだ。例えていうならば、「好きなおかずは一番最後」という感じだろうか。

しかし、一年ほど前からその置き方に変化が現れている。一番楽しみな本を一番最初に置くようになったのだ。理由は、中学生になって忙しくなったから。一番読みたい本を一番最後に読もうとすると、あっという間に返却期限の二週間、延長も入れると四週間が過ぎてしまう。お目当ての本を読むことができない。だから、今は一番最初に一番読みたい本を読んでいる。

この読み方になって、気づいたことがある。それは、「読みたい本を最初に読む方が、全体としてストレスなく読むことができる」ということだ。一番読みたい本を最後に読んでいた頃は「この本を読まないとあの本に辿りつけない」とどこか自分を縛っていたようなところがあった。その時は「読みたい本を最後に読む方がワクワク度が上がる」と考えていたが、実際は一番最初に読む方が楽だ。「絶対全部読まなきゃ」と思わない。そもそも毎回毎回十冊借りる私も悪いのだが。

また、私は私物の本の置き方にもこだわりがある。一般的な置き方としては、シリーズ物は一巻から順に置いていくのが普通だろう。ところが、私は少し、いやかなり違う置き方をする。自分でテーマ別に分けて置くのだ。例えば、シリーズの中で特に「勇気」の要素が強いなと思ったものを取り出す。特に「勇気」を感じるところに付箋を貼ったりしても良い。それらをシリーズに関係なくかためて本棚に置く。では、この置き方にすると何が良いのだろうか。それは、状況に合ったアイデアを思いつくことができたり、自分の感情を新たに見つめ直すことができ

ることだ。例えば、家族や友達とケンカして謝りたいけれど、勇気が出ない、という状況があるとする。そういう時、「勇気」に関する本を集めた棚から本を選ぶ。すると、上手く謝ることができる方法や、謝り文句などのヒントが得られる。このように、テーマ別に本を分けると、今の自分にぴったりな本を選ぶことができるのだ。

私の本の置き方はこれまでたくさん変わってきた。これからもきっと変わっていくだろう。また本を読む時間がたくさん出来たら読みたい本を端に置くかもしれないし、新たな本の置き方を編み出すかもしれない。でもただ一つ変わらないのは、私は私の好きな本が並んだ本棚を眺めるのが大好きということだ。

《中学生の部》優秀賞

あずかりやさん

中部中学校　三年

名和佑花

図書室で何気なく手に取ったこの本。読む本が無くて困っていた私が、適当に選んだ本でしたが、読み進めていくうちに、なぜか昔を懐しむような温かく、ほっこりとした気持ちになりました。

この本は、目の見えない店主があるきっかけで「あずかりやさん」という商売を始め、一日百円で依頼者が持ってきた物を大切に預かる、というお話です。預けられた物にはそれぞれの依頼者の思いがあり、なぜそれを預けたのか、どうして預けることになったのかなど、様々な事を通して人と人との繋がりや温かさを感じられるストーリーになっています。そしてこの本は、店主目線でもなく、客目線でもなく、主にはこの「あずかりやさん」にある「物」の目線で書かれています。店主にひそかに恋心を抱いているのれん、あずかりやに預けられた自転車、二十年間ずっと店に置いてあるガラスケースなど、様々な物が日々あずかりやさんに訪れる客の観察をしています。物の目線で書かれているところが、新しくて面白いなと感じました。

そして、私はこの本でとても印象に残ったある一つのお話がありました。

ある日、大企業の社長執事と名乗る一人の老人があずかりやを訪れました。その老人は一枚の封筒を二週間預かってほしい、と言いました。それから二週間ごとにその老人は封筒を取りに来ては預けて、ということを繰り返し、何度もあずかりやを訪れました。

しかし、ある時から老人は店に来なくなりました。何かあったのか、そう思ったその時ある一人の男が来店し、オルゴールを五十年預かってほしいと言いました。一日で百円なので合計百八十二万五千円にものぼる金額で店主はとても驚きました。そして、このオルゴールを預けるのはある方の遺言だと男は言いました。「実は、封筒を預けたのは社長本人で、自分が本当の執事だ。社長は自分の余命が短いと知り、ずっと大事にしてきたオルゴールを自分の死後、大切にしてくれる人を探していた。その時、あずかりやさんの店主の噂を聞き何度も店を訪れるうちに、店主が仕事を全うする、揺るぎない姿を見て、社長は信頼してオルゴールを預けると決めた。社長は亡くなったため、本当の執事の私がこうして店に来た。」と男は言いました。

私はこのお話を読み、人は言葉で変わるものではなく、その人の生き方や行動に影響を受けて変わっていくのだと思いました。自分の信念を持ち、責任のある行動をすることが結果的に、他の人からの信頼を得ることに繋がるのだと感じました。

この本の全体を通して、人や動物、この世界にある全てのものが生活を支えているのだと思いました。私が使うこのシャーペンもこんなことを感じているのかな、と改めて物を大切にしようと思えました。私にとってこの本は、心を温かく穏やかにしてくれる大事な大事な一冊となりました。

《一般成人の部》最優秀賞

若者よ、ぜひ『鳳仙花のうた』をよんで！

谷口訓子

九月半ばの週末、東京・錦糸町で「日韓断交を訴える嫌韓デモ」が行われた。主催者は外国人排斥のスローガンを掲げる集団だ。慰安婦、徴用工、貿易摩擦……日韓関係はかつてないほど悪化している。そんな中、私は日本に棲む韓国人・朝鮮人の心の痛みを思い、李正子『鳳仙花のうた』（一九八四年、雁書館）を紐解く。若い人にぜひ読んでもらいたい。

はじめてのチョゴリ姿に
未だみぬ祖国知りたき
唄くちずさむ

香山　正子

この歌は朝日歌壇に出し、選者の近藤芳美がトップに選んだ。在日歌人として初めて中学・高校の教科書にも載った歌だ。二十歳になった年の三・一記念日に出席するため両親が贈ってくれたチマ・チョゴリを着たという。上野市で生まれ、小学一

年で阿山村に転居、一家は綿工場をもち、父は綿打ち、母は布団の仕立で生計を支えていた。転校した翌日から、チョーセンジンはいばるな、お前らは米食べるな！砂食べろ、とののしられ、石をぶつけられたという。彼女の姿は、私が初めて教職についた時に出会ったMと重なる。問題生徒であった彼の上の前歯が二本欠けたままなので「どうして治さないの？」と聞けば「中二の時、上級生から〝チョーセンへ帰れっ〟と自転車ごと堤防から落された時に欠けたんです。この悔しさを死ぬまで忘れないでおこうと、このままにしてるんです」と答えた。韓国籍の彼と朝鮮半島の歴史や現況を話すうち、両親の故郷に思いを至すようになり卒業証書は朴―と本名を書いてもらうまでになった。大阪にある電気工事店にやっと就職したのに、感電死したと聞いたのは卒業からわずか半年後であった。身内が死んだような哀しみと19で逝かねばならない朴の口惜しさを思うと泣けてきて仕方がなかった。

李正子は高校卒業後、民族系の銀行で働きはじめ、『万葉集』に感動したりして我流で歌いだしたのだ。

いつまでも在日と
　　呼び呼ばせてる
百年不変の日本の恣意

彼女が負う人生は在日韓国人であるという事実である。分断された祖国への思いを吐露できるのが短歌であった。日本のことば、日本の詩型で歌わねばならない。34歳で近藤芳美主宰の『未来短歌会』に入り、翌年出したのが『鳳仙花のうた』だ。鳳仙花は風に飛ばされた種子がどこにでも芽を出し、花を咲かせる強さを持つ。「鳳仙花」は東京で学び、後に故国で独立運動に加わった洪蘭坡が作詩した歌曲だ。単なる花を愛でる歌ではなくて統治時代この花に抵抗と独立の志を託して歌い継がれた民衆の歌曲だ。彼女も洪の意を汲んで第一歌集に『鳳仙花のうた』という題名をつけたにちがいない。

指紋押捺制度に反対したり、ハングルを習得したり、と行動的になってゆく。彼女は自己に内在する「恨（ハン）」を諦観ではなく、忍耐を積み重ね、新しい場面や次の世界を短歌で表現する「恨」の歌人だ。

《一般成人の部》優秀賞

「浮世の画家」と「國之楯」

松本　康

小早川秋聲の「國之楯」を見て衝撃を受けた。NHKの「日曜美術館」で紹介していた絵画である。一人の戦死した兵士が横たわり頭部は寄書の日の丸で覆われ、胸部に軍刀が置かれ、手袋のまま合掌している。番組によると秋聲は従軍記者として中国大陸で日中戦争の戦場の絵を描いていたという。陸軍に依頼されて描いた「國之楯」であったが、死者の絵画は兵士の士気に関わるとして陸軍から受け取りを拒否されたという。

この絵を見てカズオ・イシグロの「浮世の画家」を連想した。主人公は戦中に画家として活躍した小野益次であり、戦意を昂揚させる絵を多く描いて表彰され、多くの弟子に囲まれ大御所としての地位を築いていた。しかしながら戦後は戦争協力者として世間から見放され画家を引退している。小野の末娘の縁談は破談となり、小野は回想を交えながら自らの生き様を顧みる構成となっている。

人は社会の中で、その時代に合わせようとする存在である。戦時中は圧倒的な軍部の「撃ちてし止まむ」等のスローガンによって戦争一色であり、芸術家も戦争賛美の作品を発表し戦争への協力を惜しまなかった。仮に内心では戦争に反対でも、それを口にすれば特高警察に捕まる時代であった。

戦後は、その価値観が反転し戦争に協力した作家や画家、音楽家らは、仲間うちからも反省するようにとの圧力がかけられた。

「浮世の画家」は、そのような戦前戦後の価値観の逆転した中での一画家を描いており重くて深い人間の有り様を追求した文学作品である。

私は小早川秋聲という画家を知らなかったが、ウィキペディアで見ると、彼は僧籍の出であり、戦後は仏画等を描いて過ごしたと書かれている。また「戦争画は、華々しい戦闘場面や勇壮な日本兵の活躍を描いた作品が多いが、秋聲の作品にはそうした絵はあまり無く、戦場での兵士たちの苦労や、兵士の死を悼む作品が描かれた」「秋聲は自分が「戦犯」として捕らえられるのを疑わなかった」等の記述もある。

秋聲は、政府による戦争の遂行を絶対的なものとして受け入れ、戦争の犠牲者を「國之楯」となった者として、その死を僧侶として心底から悼むことを自分に課したのではなかろうか。

国策により多くの若者は赤紙と呼ばれる召集令状一枚で兵士にさせられた。そして粗悪な装備で戦場に駆り出され、「敵」とされた兵士を殺さなければ自分が殺されるという極限状態に置かれるのが戦争である。芸術家たちはそれらの兵士を戦場で勇敢に戦うことを促すプロパガンダの役割を担ったのである。

現代に生きる私たちは世界の国々と友好的に接することにより戦争の芽を常に摘み続けることが大切ではないだろうか。

《一般成人の部》優秀賞

令和に思う

奥田　かなえ

平成元年から川島地区市民センターで始まった「万葉読書会・さわらび」が、平成を乗り越え、令和元年に突入した。